

## 第 146 回（2023 年度春季）大会若手研究者優秀賞選考報告

### 1. 選考の経緯

#### ・5月1日 第1回選考委員会

委員は、鬼丸朋子、上村泰裕、引馬知子、田中裕美子の4名。田中を委員長とし、選考対象者リストを確認し、今後の選考日程を決定した。

#### ・5月12日 フルペーパー受領、審査対象11人で確定。

#### ・5月22日 第2回選考委員会

提出された11本のペーパーを対象に一次選考を行い、4人を二次選考の対象とした。

#### ・5月29日 第3回選考委員会

第2回選考委員会で候補となった4人について二次選考を行い、優秀賞授与対象者を決定した。あわせて本人に対し、若手研究者資格の最終確認を行った。

#### ・6月1日 第4回選考委員会

選考報告文書の内容を確定した。

#### ・6月3～4日 大会

### 2. 選考の結果（受賞作）

鈴木恭子（労働政策研究・研修機構 研究員）

『「二重性」をめぐる議論と圧縮された近代化』

### 3. 選考の理由

このフルペーパーは、社会科学的認識が政策形成に及ぼす影響への関心を背景として、労働市場の二重性をめぐる研究史に批判的考察を加えたものである。英米圏の代表的理論である「二部門モデル」「二重労働市場論」「内部労働市場論」を参照し、それぞれの異同を精緻に分析したうえで、1930年代以来の日本における二重構造論の盛衰を論理的に位置づけた点は高く評価できる。経済発展の異なる段階に照準を当てた上記三つの理論モデルが、日本では二重構造論として連続的に議論されてきたとする指摘は説得的である。その原因を「圧縮された近代化」に求めるのは興味深い仮説であり、今後さらに検討する必要があるだろう。分断モデルに基づいて労働市場の構造的不正義を問うような実証研究を進めるべきだとする鈴木会員の指摘は重要である。選考対象となった11本のなかでも群を抜いており、委員会は全会一致で鈴木会員のフルペーパーを授賞にふさわしいものと判断した。

なお、審査の過程で以下の二点が指摘された。①1980年代に二重構造を肯定的に捉える研究が現われたことは説明されているが、その後、分断モデルから連続モデルへの転換が生じた理由の説明が不十分ではないか。また、二重構造論が忘却されたというのは新古典派経済学の話であって、社会政策学会で忘却されたわけではなかったのではないか。②労働市場の二重性の認識が特定の規範的・政策的主張に結びつくとは限らないのではないか。分断モ

デルの視点を失ったことが非正規雇用問題への対応を遅らせた、とまで言えるかどうか。以上の論点は授賞を妨げるものではなく、今後の議論に開かれている。

(第 146 回大会若手研究者優秀賞選考委員会)